



ルカ福音書 1-2章 ヨハネとイエスの生まれ

ルカ 1:-2:	2017.1.20			
	1:5-56 ヨハネ、イエス 生まれる	1:57-80 ヨハネ 生まれる	2:1-21 イエス 生まれる	2:22-52 エルサレムで
・ 詩がある	マリヤ	ザカリヤ	御使い	シメオン
・ あゆみ、アブラハム契約、救い主	ハンナ 142: 517-2422:			
・ 栄光が、全地、石民に。(平和な音)	ルカ19:37-38 (イザヤ)			
・ 人物	ザカリヤ、エリザベツ、マリヤ、ヨセフ、マリヤ(両親)、シメオン、アンナ			
・ 御使い / 預言者	御使い	預言者	御使い	預言者
・ 喜び知らせ / 律法、知恵、教え	喜び知らせ	喜び知らせ	喜び知らせ	喜び知らせ
・ エピソードが流し、強引に...	成長			
・ 場所	神谕、ナザレ、ユダヤ地		ベツレヘム、シセテ、エルサレム	
・ 石民の、向ふ働きと喜び	ヨハネ: 立派	ヨハネ: 至善	イエス: キリスト	イエス: イスラエルの救世主
	イエス: 至善	預言者		

ルカ福音書の1章から2章の分析をしています。

1章から2章がクリスマスの時によく読まれたり、歌が歌われたりするので馴染みのあるところだと思います。繰り返しのことばや言い方がとても多い段落で目が回りまじした。マリヤの歌、ザカリヤの歌、御使いたちの賛美、そして、シメオンの歌。この4つが各段落に入ってるような感じですね。

4つに分けるのが良いと思います。「ヨハネが生まれます、イエスが生まれます」という箇所と、「ヨハネが生まれました、そして歌を歌う。イエスが生まれました、そして歌を歌う」という箇所。それと、「エルサレムに行ってシメオンとアンナが歌う」。そして12歳になった時にもう一度エルサレムに行くと。この「エルサレムに行って、エルサレムに行って」という4つの段落。真ん中2つは短いですね。外側が長い感じです。

4つに分けて見てみると歌がありました。最初はマリヤ、次はザカリヤ、御使い、シメオンと。それと1章、この最初と2番目の段落には、マリヤの歌がハンナの歌を連想するもの、もしくは連想してマリヤが歌っている。それとザカリヤのところは、ダビデの救いの角という言い方もありますので、ハンナも連想するんですけど、第2サムエル22章、詩篇18篇のダビデの歌というところも連想するところかなと思います。マリヤの歌とザカリヤの歌を見ると、「憐れみ、憐れみ、憐れみ、憐れみ、憐れみ、憐れみ、

憐れみ」。それと「アブラハムに誓われた通りである」というようなことが言われていますね。その救い主が来ましたというところが共通点かなというところ。それと、この後ろ2つの御使いとシメオンのところを見ると、御使いの方は「神の栄光が地の上で平和が」と。「いと高きところに栄光、地の上に平和」。それと「御救いが万民に、異邦人に、イスラエルに」ということで、栄光が全地、万民に、平和の君であるイエスを褒め称えるというところで、イザヤ書などに言われている王の支配が完成しているかのような感じですね。ルカの19章にもう一度この天の軍勢の賛美と同じようなものが出ていますが、イエス・キリストがすべてを支配する王として来るといふようなところの歌という共通点があると思います。

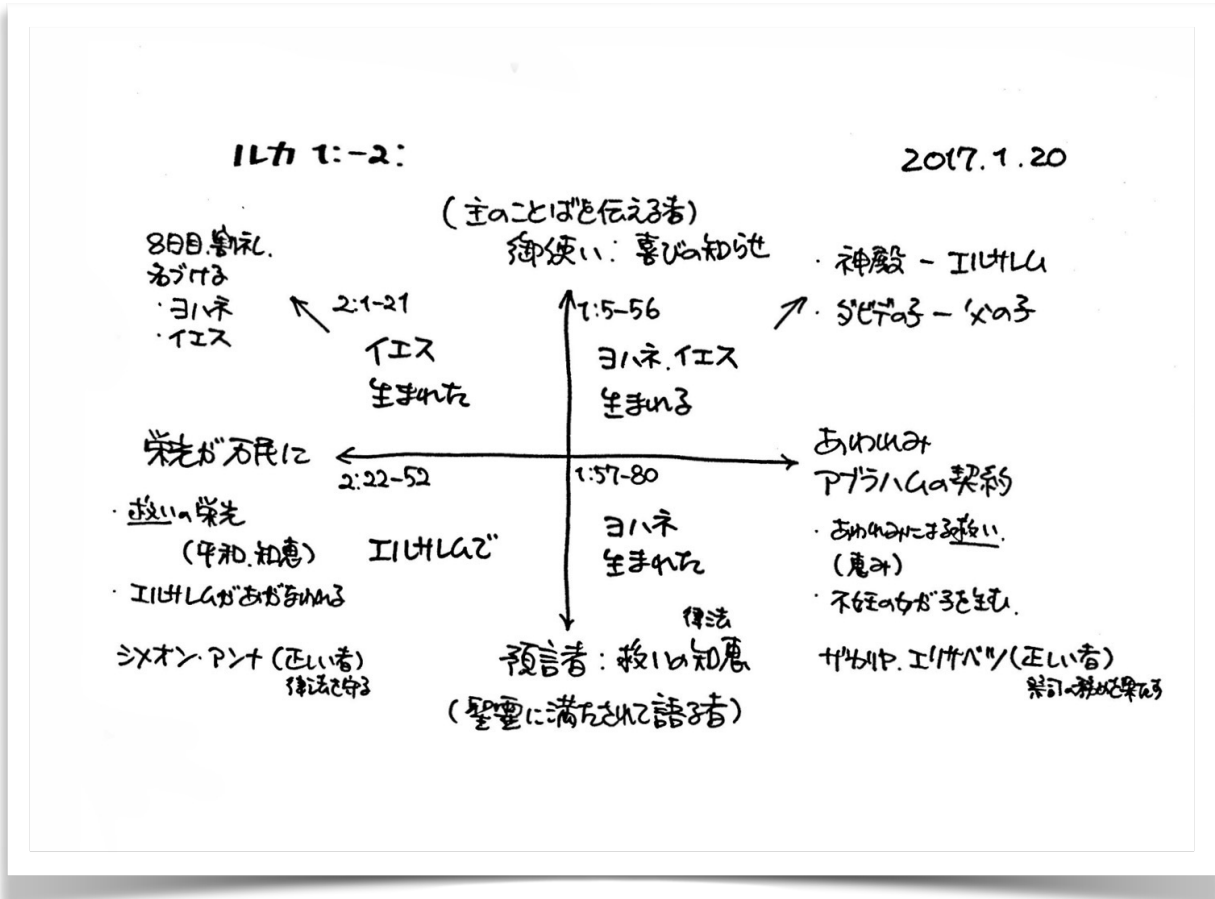
人物としては最初の2つの段落は、ザカリア、エリサベツ、マリア。2章からのところは、ヨセフとマリアで、「両親が、両親が」というふうに出てきますね。それとシメオンとアンナという、登場人物としては、前半後半、1章と2章で少し違ってきます。

シメオンは名前としてはサムエルのような「聞く」という語源がある名前ですね。ハンナはヘブライ語で言うとハンナということになりますから、サムエルとハンナ。ハンナの生んだサムエルみたいな組み合わせで、そこが思い出されるころだと思えます。エリサベツはエリセバという名前で、旧約聖書の中で一度しか出てこないアロンの奥さんの名前です。大祭司の家系の者ということですね。ザカリアは大祭司の組なのですね。大祭司系ということがわかると思います。この話を導いている人は、「御使い、預言者、御使い、預言者」と書いてあります。最初の段落に、「御使いカブリエル」と名前まで付いています。それで預言者。預言者ザカリアと言っているのは、聖霊に満たされてザカリアは預言していると。預言ですね。それで天の御使いたちの歌というのが3番目の段落で、最後の段落2章の後半の方の段落は、聖霊に満たされて預言するシメオン。それと女預言者ハンナということですので、御使い、預言、御使い、預言という並行があるのかなと。御使いの方は喜びの知らせを語る伝える御使いは喜びの知らせを伝えるとそれで預言者の方は「教え、律法、知恵を教える」という並行があると思われま

す。ここ下の方は、1の57からの段落の終わりに「幼子は成長し霊は強くなり」と。これはヨハネの話です。イエス様の話も同じように「幼子は成長し強くなり知恵に満ちていく」と。「イエス様はますます知恵が進み神と人々に愛された」というこの段落の終わりの言い方も区別するのに役に立つところだということですね。

ここには書いていませんが、この1章の終わりのところは8日目の割礼の話で名前をつけますと。2章の最初は8日目の割礼で名前をつけましたというところで終わったりしていますので、こここの2つも並行しているものとしてみると良いと思われま

す。最初の段落は、神殿の話で始まって、ナザレ、ユダの山地と行きます。ベツレヘムでダビデの町でという話になり、最後エルサレムの宮でというふうに「神殿、ユダの地、ユダの地、エルサレム」というふうに話が戻っていくというふうにも見えますね。



このようなところを並行しているのを見ると、この形1234、4つの段落です。「ヨハネ、イエスが生まれる(1:5-56)」「ヨハネが生まれた(1:57-80)」「イエスが生まれた(2:1-21)」「エルサレムで(2:22-52)」という4つの段落ですけれども、上の2つ(1:5-56)(2:1-21)は、主の言葉を伝える、御使いが喜びの知らせを伝える。下の2つ(1:57-80)(2:22-52)は預言者と書いてありますが、聖霊に満たされて語る者である預言者が、救いの知識、救いの知恵、律法の本当の意味というものを語る。1章の方(1:5-56)(1:57-80)の共通点は、歌のところで憐れみとアブラハムの契約ですね。2章の方(2:1-21)(2:22-52)は、栄光が万民にという話です。この2つの並行は何だろうかということなんですが、1章の憐れみとアブラハムの契約と言っている方は、憐れみによる救いだ。その救いの栄光が現されますよというのが2章の方です。救いの栄光はどうやって表わされるかということ、平和である。その支配されている場所であるエルサレムが平和である。知恵によって平和が与えられている。これを見て反映が与えられている。これを見てその栄光が現されるということですね。こちら2章は恵みによる救い。救いの栄光、これは平和。恵みと平安というものがこの2つの1章と2章を分けているのかなと。不妊の女が子を産む、エルサレムが贖われるというこの「女と都」も並行しているものとしては書かれているものだと思います。

脇役としてザカリアとエリザベス。これは正しい者。「主の全ての戒め、定めを正しく行っていた二人とも」と言われています。エルサレムにシメオンという人がいて、この人は正しく敬虔ですと。イスラエルの慰められることを待ち望んでいたと。アンナも正しい人だったというリストみたいな感じですね。エルサレムの贖いを待ち望んでいたという正しい人たちというのが、恵みと平安のメッセージを支えているところになっています。

生まれたところが8日目に割礼を与えて名前を付けるというところで、こちらのばつてんの方(1:5-56)(2:22-52)ですね。最初と最後の方は、神殿とエルサレム。ダビデの子と父の子なのかなと見ていますね。1章の25節までこれは神殿での話です。2章の上の段(2:22-40)は、エルサレムの宮での話です。1章の後半の方(1:26-56)は、ダビデの王座に就く者。

こっち(2:41-52)は、父の家にいる神の子というのが中心かなというふうにも見れますので、(1:5-56)神殿、ダビデの子、エルサレム、父の子。こちら(2:22-52)は、エルサレムで父の子。神殿でダビデの子とこれがクロスしている感じですけど、この場所のテーマとその約束に従って生まれてくるのはヨハネ、恵みのハンナであり、イエス。新しい連れ出してくれるヨシュアであるヨハネと、「エリアの霊と力」と言っていますから、エリアじゃなくてエリシャなんだね。エリシャのようなものを想定している感じですね。この連想されるものとしてエリシャのストーリーを思い出さないといけないバプテスマのヨハネと、連れ出すイエスは新しい平和の地に連れ出すヨシュアということを連想するように言われているのかなと思います。なぜヨハネという名前で、エリアじゃないのかよく分かりませんが、ハンナの男の人の名前のような感じですから、不妊の女から生まれる救い主を導く雛形、預言者の雛形ということなのかなとも思います。普通分析した時には、縦横の2方向とか、斜めと上下とか、2つだけなのですが、この場合は3方向とも並行があるので、たくさん並行している言い方があって少し混乱しますけれども、このように4つに分けて見てみるのが正しいのではないかと分析しました。